

泉 並木さん

武蔵野赤十字病院 院長



意識の高い市民の
ニーズに応えられる
質の高い医療を
提供するのが使命です

新型コロナウイルス患者の治療にも尽力している武蔵野赤十字病院。高度な医療体制を確立しながら地域とのつながりを重視する市民病院的な役割について、院長の泉並木さんにお聞きしました。

武蔵野赤十字病院は、戦後間もない1949年に創設され、昨年で70周年を迎えました。創設以来、掲げてきた理念は「愛の病院」。ここには、病む人への愛はもちろん、同僚や職場への愛、地域住民と地域への愛など、さまざまな思いが込められています。今回の新型コロナウイルス感染拡大によって医療現場にも大きな転換が求められましたが、この理念が根底にあることはこれからも変わらないでしょう。

当院は「地域医療支援病院」にも指定され、地域との関わりも密接です。地域の開業医の先生方と連携を図りながら、より高度な医療については私たちが責任を持って行い、再び開業医の先生の元に患者をお返しする。がん患者のサポートなども地域の病院と役割分担をしながら、地域全体としてより豊かな医療が行える体制を築いています。

武蔵野市は、65歳以下の人口が増え、さらに15歳以下の人口も増加傾向にあるという全国的にも珍しい地域です。また、35歳以上の分岐も増えていることから、合併症

を発生するリスクにも備える必要があるため、私たちのような総合病院での分岐のニーズが高まっています。そして、働きながらがんの治療を続ける方も多い。このような地域のニーズに対して、しっかり対応できる体制を整えておくことが重要になります。

私は医学部に通う学生時代から吉祥寺周辺に住み、今も武蔵野市在住ですから、この地域とはかれこれ40年以上のつきあいになります。なぜか他のまちに住みたいとは思わなかったですね。何をすることもこのまちだけで事足りる利便性がありながら、井の頭恩賜公園のような自然もあり、文化人が多いイメージもある。どうしてもこのまちに住みたいと思う人が多いのもうなずけます。私たちの病院も、そうした意識の高い市民の方たちの要望に応えられるよう、質の高い医療を提供していく使命があります。地域や行政から信頼される病院という文化をつくるのも、院長の役割です。文化さえつくっておけば、いい人材もおのずと集まってくる。そう信じています。

泉 並木 (いずみ なみき)

1978年、東京医科歯科大学医学部卒業後、東京医科歯科大学第二内科に入局。1986年より武蔵野赤十字病院内科副部長、同消化器科部長、同副院長を歴任し、2016年院長に就任。C型肝炎ウイルス発見以前よりインターフェロン治療に取り組み、肝がんのラジオ波熱凝固療法で世界的にも知られる。趣味のバイオリンを弾く時間が息抜きだという。

